経済論叢（京都大学）第 196 巻第 1 号，2022 年 2 月

経済学部優秀卒業論文賞受賞論文

マクロスキー 4 R モデルの検証
―近世オランダにおける「開かれたブルジョワ社会」の形成過程―

吉　川　英　輝*

Ⅰ．はじめに

自由市場に特徴付けられる近代経済の成立によって，人々の暮らしは格段に豊かになった。様々なイノベーションに支えられ，経済はシュンペーター的成長を続け，人々の所得水準・生活水準は劇的に向上した。マクロスキーは近代から現在に至る，人類史上一度しか発生していない所得水準の異常な増加を「大富裕化（the Great Enrichment）」と呼んだ（McCloskey［2017］）。

コルナイによると，経済における自由主義がイノベーションを生み出し続けられたのは，それが「分権的創意性」，「巨大な報酬」，「競争」，「広範囲の実験」，「投下を待つ資本準備・融資の柔軟性」を可能にしたからであった（コルナイ［2016］）。しかし，数多くの経済史家は，経済における自由主義が経済成長を促した「過程」を研究するだけでは飽き足らず，特に西ヨーロッパにおける近代経済の「起点」を探究してきた。わけても，イノベーション文化が花開く前，つまり産業革命前夜の助走段階として認識される近世[1)]は特に経済史家の関心を惹き続けている。一方，その統一的見解は未だ得られていない。なぜなら，近代経済の誕生に不可欠な「近代市民社会（＝開かれたブルジョワ社会）」がなぜ成立したのかという問題は非常に広範な変数を扱うからである。

近代経済の基礎となった「開かれたブルジョワ社会」がどのように誕生したかという問いに答えようとする数多くの古典的な研究のなかでも，ウェーバー［1989］の研究は特筆すべきである。ウェーバーの考えは人間の内面的変化に着目したもので，カルヴァン派信仰においては，隣人愛とは神の栄光への奉仕であり，その実践は自然法（lex naturae）によって与えられた職業という持ち場にあたって神の誡めを実行することに顕われる（ウェーバー［1989］）。また，カルヴァン派に特有の禁欲的な消費行動は，勤勉な労働という宗教実践によって生み出された富を，生産における再投資に向けたことで経済発展が促されたとウェーバーは理解した（ウェーバー［1989］）。

また，他の古典的研究として，制度派経済史家のノースとトマスは，市場の効率性という人々を取り巻く環境に着目し，私有財産制の法整備や商業人の権利を守る裁判所の設置が近世に行われたこと，そして大規模な定期市の開催が市場取引にかかるコストを引き下げたことで，経済成長が発生したと述べた（ノース，トマス［2014］）。

しかし，マクロスキーはそれらの考えを否定する。カルヴァン派の思想とブルジョワの倫理観に

＊　京都大学大学院経済学研究科／ School of Social and Political Sciences, University of Glasgow ／ Faculty of Economics and Business, University of Barcelona 修士課程

1）本稿において「近世」とは，中世の封建的身分秩序が動揺し，反動を時には伴いながらも，社会経済構造が非封建的なものに移行する時代を意味し，おおよそ宗教改革から産業革命までの時代を指す。

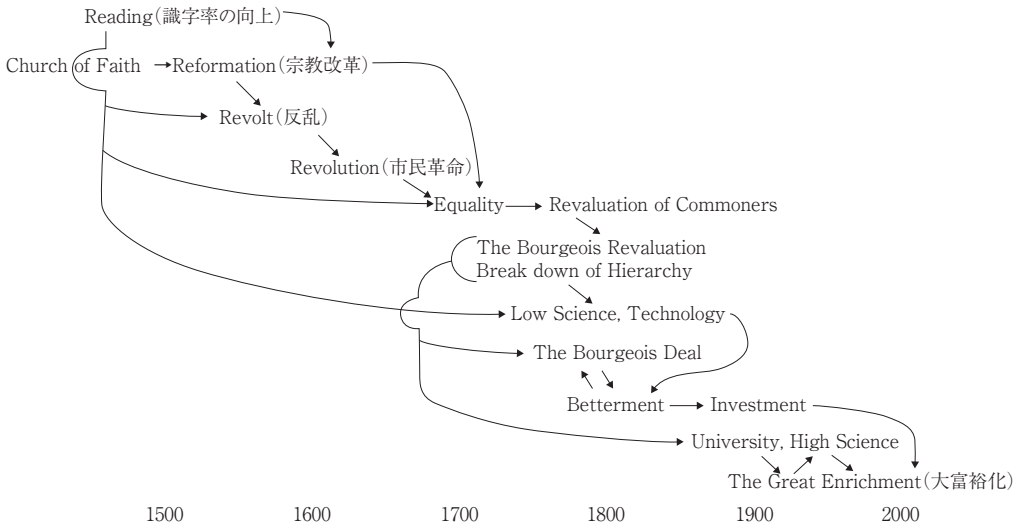

図1　マクロスキーの4Rモデル

（出所）McCloskey, D.N［2017］ *Bourgeois Equality : How Ideas not Capital or Institutions, Enriched the World*, Chicago, The University of Chicago Press, p XXXVI. Figure 1を原図とし，本稿筆者が訳語を付した。

は関係がないためウェーバーの議論は誤りであり，私有財産制などの諸制度は近世にのみ見られる現象でも，西ヨーロッパにのみ見られる現象でもないため，制度派経済史家の議論は不完全であるとマクロスキーは論じた（McCloskey［2010］; McCloskey［2017］）。

そこで，マクロスキーは「大富裕化」の要因を近世に求め，その発生メカニズムを4Rモデルで説明した（McCloskey［2017］）。4RとはReading（識字率の向上，識字化），Reformation（宗教改革），Revolt（反乱），Revolution（市民革命）を意味する（McCloskey［2017］）。図1に示されるとおり，ReadingがReformationとRevoltを誘発し，ReformationがRevoltを誘発し，RevoltがRevolutionを誘発していった結果，社会のヒエラルキーが崩壊し，人々を縛るものがない平等的自由主義（Egalitarian liberalism）に特徴付けられる「開かれたブルジョワ社会」が誕生した（McCloskey［2017］）。そのなかで，ブルジョワ主導によるイノベーション文化（Innovism）が花開き，近代経済が誕生した（図1参照）（McCloskey［2017］）。

マクロスキーによれば，このように近代経済が発生した最初の場所はオランダであった[2)]（McCloskey［2017］）。確かに，オランダは17世紀に毛織物産業と貿易を柱に黄金時代を築き上げた。図2からわかるように，17世紀の共和国では一人あたりの産出量が初めて持続的に増加し，マルサスの罠から逃れられた場所であった（ノース，トマス［2014］; ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］）。その経済成長の礎には16世紀後半の事実上の建国があり，その建国には

2）本稿では「オランダ」という語を，ネーデルラント連邦共和国の17世紀初頭の成立以降，国家の形態・名称・政体・領土の変化を伴いつつも，今日まで相当程度の連続性を持つ低地地方の国家の通称として用いる。本稿の記述における「北ネーデルラント」はおよそ今日の「オランダ」の領土を指すものとし，建国以前の当該地域を指す場合には「北ネーデルラント」という表現を用いる。「ネーデルラント（低地地方）」は後のオランダとなる「北ネーデルラント」と，「南ネーデルラント」を合わせた地域である。

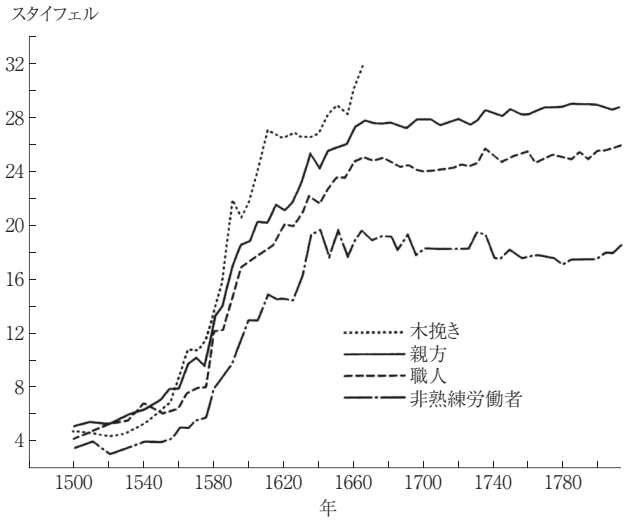

図２　オランダ西部の平均賃金，1500-1815 年（夏期の日給；単位：スタイフェル）

（出所）ド・フリース・J, A・ファン・デァ・ワウデ［2009］『最初の近代経済―オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815』大西吉之，杉浦未樹訳，名古屋大学出版会，583 ページ。

宗教改革や 1560 年代後半からの独立戦争が密接に関連している。そのため，McCloskey の述べる４Ｒモデルはオランダ経済の成功を語るうえで，参照されるべきモデルである。

しかし，この４Ｒモデルは不完全である。というのも，前段階にあるＲが後段階にあるＲを誘発するという論理は不完全であり，実際は双方向に影響しあった可能性を排除できないからである。例えば，識字率の向上が宗教改革を発生させたという一方向のメカニズムは，なぜそもそも中世まで一般的に非常に識字率は低かったのにもかかわらず，いきなり識字化が発生したのかを説明することはできない。また，中世末期に英仏のような強固な封建制をもたなかったネーデルラントの経済発展を説明するには，封建制を前提としたマクロスキーの説明では不十分である。

そこで，本稿の問いは以下のようになる。ネーデルラント連邦共和国（または，建国前のそれに相当する地域）の近代市民社会成立過程は，４Ｒモデルで説明されるのだろうか。どのような出来事が発生し，それは４Ｒモデルでどのように説明されるのだろうか，もしくは説明されないのだろうか。当該地域のヒエラルキー構造はどのようなものであり，どのように崩壊していったのだろうか。それぞれのＲの発生は近代化においてどのような働きをしたのだろうか。

この問いに答えるため，北ネーデルラントが大変容し，近代への素地が整えられていった 16 世紀後半から 17 世紀前半を主な研究対象期間とし，社会集団（聖職者，貴族，都市市民など）の社会的地位とそれらが担った役割の変化を事件史から明らかにすることを目的とする。そして，これらを明らかにするため，２次文献を用いて，ローマ教会派とプロテスタント諸派[3)]の教義の違いが

3）本稿では，伝統的キリスト教である「ローマ教会」に対して宗教改革を行った諸派（ルター派を含む）を総称してプロテスタント諸派と呼ぶ。また，プロテスタント諸派の思想，信仰をプロテスタンティズムと呼ぶ。

どのように人々の正義感や社会に対する見方を変化させたかという内面的側面に軸足を置きながら，人々の社会に対する見方がどのように行動にあらわれるかという外面的側面も間接的に描く。

本稿の構成を説明する。まず，近世の北ネーデルラント（もしくは，オランダ）における社会変動について，独立戦争を中心に概要を紹介する。そして，識字化と宗教改革の双方向の関係を明らかにし，同様に宗教改革と市民革命の関係，市民革命と識字化の関係を明らかにする。そのなかで，それぞれのRが「開かれたブルジョワ社会」の構築にどのような働きを行ったかを重視しながら，R相互の関係を明らかにする。なお，反乱と市民革命は支配権力に対する反乱が成功するか否かによって異なるだけである。オランダの場合，それらは本質的には同質のものと見なすことができる。本稿では，市民革命とは成功したオランダ独立戦争であり，反乱は市民革命の説明に組み込ませることにする。

Ⅱ．近世オランダにおける社会変動

本節では，近世の北ネーデルラント（もしくは，オランダ）における社会変動の概観を紹介する。主にオランダ独立戦争がどのように推移していったかを叙述する。

オランダ独立戦争（80年戦争，ネーデルラント独立戦争）は，1560年代後半から1648年にかけて，ネーデルラント諸邦がスペイン王フェリペ2世による統治からの独立を求めて行った反乱・戦争である。その根底には，宗教的差異と都市自治の原理の強さがあった。

ネーデルラントに宗教改革が浸潤するのは16世紀の後半になってからである。南フランス，スコットランド，イングランドといった地域への宗教改革の「西への前進」はカルヴァン派というプロテスタンティズムを先鋭化した形態を取り，ネーデルラントも「西への前進」の一例となった（トッド［1992］138-139ページ）。もっとも，ルターによる宗教改革前から存在したエラスムス思想はネーデルラントでも見られ，世俗の教養人にその基盤があった。エラスムス思想を先鋭化したカルヴァン派信仰は知的エリート層に最初に受け入れられた。しかし，16世紀後半に入ると，一般市民や農民，領主にもカルヴァン派信仰が浸透し，その狂信的な態度を嫌った知的エリート層はアルミニウス派という分派を作った（トレヴァー＝ローパー［1978］44-45ページ）。

ネーデルラントに宗教改革が根を下ろしたことに対し，ローマ教会派のスペイン王，フェリペ2世は対抗宗教改革として厳しい異端尋問を行った。スペインは1567年に「血の評議会」と呼ばれる特別法廷を開設し，プロテスタントを捕らえ，宗教裁判にかけてこれらを次々と処刑した。またこうした弾圧は，ネーデルラント諸邦がそれまで享受してきた自治を脅かすものでもあった。ネーデルラントの諸都市は中世から中継貿易と毛織物産業で栄え，都市自治を発達させていた。ネーデルラント出身のカール5世がスペイン王となった後も，スペインから地理的に遠かったこともあり，幅広い自治のもとで繁栄が続いた。フェリペ2世はそれに対して，中央集権化を図った。強権的にネーデルラントを服従させたかったフェリペ2世は，1567年に総督アルバ公を派遣し，市民財産の接収を行ったり，貿易に重税を課したりし，経済的自由を奪っていった。民衆による反抗は1566年頃から始まり，南北諸州は1576年に「ガン（ヘント）の和約（Pacificatie van Gent）」で団結を約束した。もっとも，ローマ教会派が多かった南部10州は総督パルマ公アレッサンドロ・ファルネーゼと妥協し，アラス同盟を結成し，その結果，スペインと協調的態度を採るに至った。しかし，カルヴァン派が多かった北部7州（ホラント，ゼーラント，ユトレヒト，ヘルデルラン

ト，オーフェンアイセル，フローニンゲン，フリースラント）の各州代表はユトレヒト同盟を1579年に結成した。これは，名目上は軍事費を共同負担する軍事同盟であったが，ガンの和約時に棚上げされたカルヴァン派信仰の堅持や外国支配に対する権利と自由の確保を掲げていた。ユトレヒト同盟の諸州は1581年にフェリペ２世を廃位し，スペインからの独立を宣言し，ネーデルラント連邦共和国が誕生した。北ネーデルラントの反乱・独立はプロテスタンティズムを奉ずるイングランド王エリザベスから支援を受けていたが，そのイングランドに対するスペインの侵攻計画は1588年のアルマダの海戦での無敵艦隊の敗北で潰え，そのため共和国は小国ながらも戦い続けることができた。1609年には12年間の休戦条約が成立し，1648年にはウェストファリア条約によって独立が国際的に承認された。

Ⅲ．Ｒ相互の連関

１．Reading と Reformation の関係

本節では，北ネーデルラントにおける識字化と宗教改革の関係について議論する。

一般に，ローマ教会は教会と聖職者の権威を重視するべく，俗人に文字が伝わらないようしてきた。聖書を読むことで教会の行動，権威に疑問を持たれることを恐れたローマ教会は，文字そのものに嫌悪感を示し，俗人が書物を読むことを禁じ，聖職者により良い教育を与えたのであった。また，聖書は個人所有するには高価であり，図書館でも鎖に繋がれ，ラテン語で書かれていたため俗人は日常的に接することが出来なかったうえ，そもそも読めなかった（深井［2017］58ページ）。そのため，一般にローマ教会の影響下の地域では，俗人の識字率は低かった。

しかし，宗教改革前の北ネーデルラントの場合は，例外的に識字率が高かったことが知られている。例えば，アムステルダムでは1578年に都市としてローマ教会支持からカルヴァン派支持に移ったが，その５年後の1583年の時点で，新郎の55％，新婦の38％が婚姻証明に署名ができた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］156ページ）。1600年の大規模な都市における識字率は約30％から約60％の幅に収まり（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］157ページ），これは近世前期において非常に高い値であった。

では，なぜ北ネーデルラントでは識字率が高かったのであろうか。その宗教的要因[4)]には，北ネーデルラントではローマ教会の力が弱かった（Huizinga［1968］）ことが挙げられる。北ネーデルラントは12世紀から干拓されたところが多く，既存の教会組織が存在しなかった。また，中世後期においても，布教や組織化の動きは弱かった。というのも，中世後期のキリスト教はフランスによる教皇幽閉が起こったり，教皇庁の分裂が発生したり，公会議と教皇庁の対立が頻発したりと内憂状態に陥っていたからである。そのような状況では，新地であった北ネーデルラントへの体系的な布教活動は乏しく，教会による支配は貧弱であったと考えられる。教会による支配力が弱かったので，教会は市民文化の発展，特に文字の広まりを妨げられなかった。

中世からの識字率の高さが宗教改革にどのような影響を与えたのだろうか。結論としては，識字率の高さは当地における宗教改革の広まりを支えたと言える。

その理由の１つとして挙げられるのがプロテスタント諸派の信仰形態である。宗教改革の神髄

４）第３節では，非宗教的側面から識字率の高さを説明する。

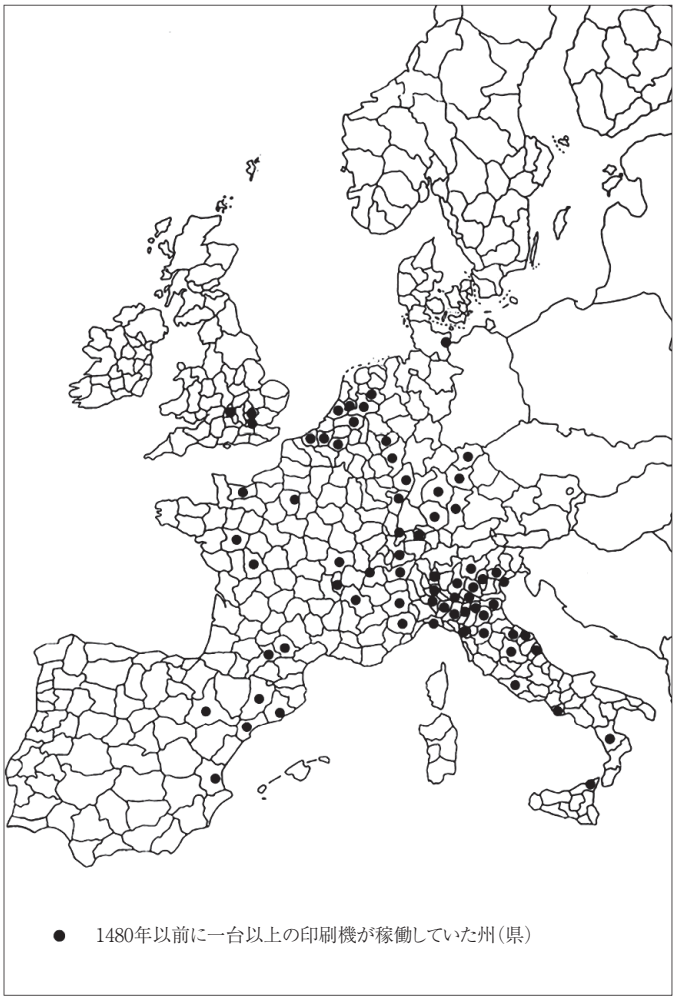

図3　1480年前後の印刷術
（出所）トッド・エマニュエル［1992］『新ヨーロッパ大全I』石崎晴己訳，藤原書店，137ページ。

は，聖書にのみ信仰の拠り所を求めるというものであった。そのため，識字能力がプロテスタンティズムの広まりに大きく貢献することになった。宗教改革前の聖書の解釈は司祭に任せられていたが，ルターは聖書の解釈を俗人が行うべきであると述べた。つまり，聖書を能動的に読むことを求めるプロテスタント諸派の信仰を受け入れるには，識字能力が前提となるのである。その関係を裏付ける統計がある。トッドによれば，識字率の高さとプロテスタンティズムの広まりには地理的な相関関係がある（トッド［1992］）。図3は1480年以前に1台以上の印刷機が稼働していた地域を示したものである。印刷機の稼働は当該地域の出版物の多さを意味し，よって印刷機の稼働と識字率との間に正の相関の関係があると仮定すると，宗教改革が進んだ地域には，ローマに近い地域を除いて，ドイツ語圏，南フランス，スコットランド，イングランド，そしてネーデルラントといった識字化が相対的に進んでいた地域が多かったと結論づけることができる（トッド［1992］138ページ）。

また，プロテスタント諸派が信仰を広めるのに文章を用いたことも，宗教改革が識字能力を必要としたことを裏付ける。ルターは 15 世紀末に実用化された印刷技術をよく利用した。ルターの活動に関する深井［2017］（56 ページ）の解釈を言い換えるならば，ルターはバチカンとの「上からの闘争」を不毛であると感じ，直接，人々にアプローチする「下からの闘争」に力を注いだのである。1520 年には宗教改革五大文書として知られる『キリスト教界の改善についてドイツのキリスト者貴族に宛てて』，『教会のバビロン捕囚について，マルティン・ルターの序曲』，『キリスト者の自由について』，『ローマの教皇制について，ライプツィヒの高名なローマ主義者を駁す』，『新しい契約，すなわち聖なるミサについての説教』を刊行し，考えを人々に届けようとした（深井［2017］56 ページ）。また，前に述べた「聖書を読む」ことに関しても，印刷技術の発展は重要な役割を担った。印刷技術の発展によって聖書が安価になり，そしてルターが聖書を訳したことで，人々が聖書を読める環境が整っていったのである。人々にプロテスタント諸派のメッセージを伝える役割を担ったのが文字であり，それを可能にしたのが印刷技術の発展であった。

一方，宗教改革は識字化にどのような影響を与えたのだろうか。宗教改革は識字率の向上を促進したと考えられる。カルヴァン派教会は教育に力を注いだ。教育は宗教教育を目的としたものであった。聖書を読むことを最も重要視するプロテスタンティズムでは，識字能力は信仰の土台となる。そのため，教会は学校の開設に尽力し，人々に聖書を読む能力を得る機会を授けた。

ラテン語学校の開設はその典型例である。それは，聖書の読解能力を意識したものであった。ルターが聖書をドイツ語に訳したとはいえ，伝統的な聖書はラテン語で書かれていたため，原文を読む能力を得ることは聖書のより深い理解を得られることを意味した。17 世紀に男子が通うことのできたラテン語学校やギムナジウムは共和国全体で 70 校を超えており，中等教育を受ける男子の割合は全体の 10 パーセントから 15 パーセントにのぼっていた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］158 ページ）。

また，初等教育の普及も目覚ましい。ホラント南部のドルトレヒトでは 1574 年の宗教会議で，学校を全ての村落に設けるべきであるという見解がなされ，また，その後の秘密会議では貧民の子どもが学校教育を無償で受けられるようにするべきという案が検討された（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］156-157 ページ）。この方針の影響を受けたドレンテでは，1630 年の布告により，7 歳から読み書きできるようになるまで，州が子ども全員の学校教育費を負担した（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］157 ページ）。

また，間接的に識字率の向上を示す例がある。トッドによれば，識字率は文化的水準の高さを表している（トッド［1992］）。識字化は受胎調節をもたらす重要な条件であるし（トッド［1992］），時空を超えた知恵・思想の伝播・継承をもたらす。そのため，実際の識字率を推測することは困難であっても，文化的水準を示す他の要素を調べることは，識字能力の動向を推し量ることと共通点がある。では，近世の北ネーデルラントにおける文化的水準の動向とはどのようなものであったのであろうか。

文化的水準の高まりを示すよい例がある。それは大学である。北ネーデルラントでは，16 世紀後半になって初めて大学が誕生した。最初の大学は，独立戦争の指導者であったウィレム 1 世により 1575 年に創設されたレイデン大学である。このレイデン大学は，単に大学が設置されたから文化的水準の高まりを示すということではない。なぜなら，レイデン大学は学問上の自由と一般市民の実益を求めるために構想され，神学や聖書学だけでなく様々な学問分野を設置すべく創設された

からである（Huizinga［1968］p.58）。また，レイデン大学の後継となるフラネケル大学（1585年創立），フローニンゲン大学（1614年創立），ユトレヒト大学（1636年創立），そしてハンダーウェイク大学（1648年創立）では，大学の世俗化がより顕著に確認される（Huizinga［1968］p.58）。それらの大学では，古典学，東洋学，解剖学，天文学，植物学，物理学，化学などが開講された（Huizinga［1968］pp.58-59）。17世紀には，18歳に達した男子の約2.5パーセントが大学へ進学していた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］158ページ）。中世の大学では神学の研究が多くを占めていたことを考えれば，北ネーデルラントの大学の「自由さ」はいっそう際立つものである。そのため，北ネーデルラントにおける「自由な」大学の誕生は文化的水準の高まりを表す。

一方，一般市民からすれば自然科学はまだ受け入れ難かった。17世紀の人々にとって，科学者は神の摂理に背く「魔法使い」であり，夢想する「錬金術師」であり，金にしか興味のない「やぶ医者」であった（Huizinga［1968］p.75）。そのため，科学者の社会的地位は低く，職業として認められていなかった。しかし，プロテスタント諸派の宗教的信条によって促進された教育は，北ネーデルラント，オランダのリベラルな風に影響され，自由な学風を作り上げつつあった。

このように，識字化と宗教改革の間には互いに促進し合う関係があったことが確認できる。識字化はプロテスタンティズムが広まる条件であったし，プロスタント諸派は信仰を広めようと識字化を促したのである。

2．Reformation と Revolution の関係

本節では，北ネーデルラントにおける宗教改革と独立戦争の関係を検討する。

意外なことに，カルヴァン派教会は独立戦争を積極的に指導したわけではなく，概して北ネーデルラントのスペインからの自立化を進める経済的活動や政策に関しては消極的姿勢をとった。例えば，消費者金融や質屋業といった高利貸しについては，反乱が勢いづくまで非合法化すべきとして反対していた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］153-154ページ）。なぜなら，「7つの大罪」のうち「傲慢」に関連し，11世紀以来最も重い罪と見なされてきた「貪欲」にあたると金融業を見なしてきた（河原［1996］）からである。1574年の南ホラント宗教会議では，富を追及する貪欲な者は聖餐（せいさん）にあずからせてはないと宣言され，この聖餐への参加論争は100年後になっても続いていた（ウェーバー［1989］295ページ）。このように，カルヴァン派教会はスペインからの北ネーデルラントの経済的自立に反する行動をとっていた。

では，宗教改革が反乱において果たした役割とは何であろうか。1点目は，信仰の変化が聖職者の特権に対する見方を一変させたことである。宗教改革以前には，教会は人々の信仰を導く存在であった。聖書を聖職者が独占し，その解釈をも独占していた。しかし，ルターはその権利の独占を批判した。ルターは『キリスト教界の改善についてドイツのキリスト者貴族に宛てて』でこう述べている。

> 「私たちは誰もがひとり残らず，洗礼によって司祭として聖別されたのである。それゆえに，信徒，司祭，諸侯，司教，あるいはローマ主義者たちのいう霊的なものと，この世的なものとは，その職務，あるいはわざに関する以外の他の差別を，原理的にも，実践的にも持っておらず，また身分による差別もない。なぜならすべての人は霊的階級に属す真の司祭であり，司教

であり，また教皇だからである。」[5)]

このように，聖職者が人々の信仰を牛耳り，そして保持していた社会的地位は宗教改革によって疑問視された。「地上」において平等主義的性格をもつプロテスタンティズムは，社会的地位の平等性を求めた。そして，その教えを受容した地域は聖職者のあらゆる特権を廃そうと反乱を起こしていったのである。北ネーデルラントでも，ローマ教会財産が接収され世俗化されたし，公職から聖職者が追放されていった。

２点目は，カルヴァン派の浸透がハプスブルク家による圧政を引き起こしたことである。フェリペ２世の父は神聖ローマ帝国皇帝カール５世（スペイン国王としてはカルロス１世）である。カール５世はイスラム教徒に対するレコンキスタを 1492 年に完了させ，異端尋問を繰り返してきた。その系譜をひくフェリペ２世は，依然として従順さに欠けた諸侯や都市代表を束ねようと「強い皇帝」を目指し，内外の宗教と政治に介入してきた。そのなかで，ローマ教会やスペインからの地理的距離が遠いため都市自治の原理が強く（Huizinga［1968］），カルヴァン派の広まっていたネーデルラントが典型的な抑圧対象となったのである。特にホラントは 16 世紀前半には既に高度な徴税制度に支えられ，ハプスブルク家の支配からかなり自立的になっていた（Tracy［1985］; Tracy［1990］）。旧来の都市自治の原理の強さが，プロテスタンティズムの広まりを支え，それがスペインによる圧政を引き起こし，そして圧政は反乱の直接的原因となったという構図が理解できる。

一方，カルヴァン派には予定説という重要な教義があるが，これはどのように独立戦争時の社会に影響を与えたのであろうか。

この問いに答えるには，まず，ローマ教会がどのように社会的地位を保持していたのかを理解する必要がある。ローマ教会の教えでは，現世での日頃の行いの積み重ねによって徳を積むことが救済への道だとされていた。中世では現在より平均寿命が極めて短く，病気で突然に死が訪れやすく，また，教会画には死後の世界のイメージが巧妙に塗り固められていた。そのため，人々の死に対する関心は高く，地獄を恐れては教会にすがる思いで救いを求めた。例えば，貴族は生前に教会に広大な土地を寄進し，徳を積もうとした。積み上げた徳で天国に近づけると考えたからである。そのような圧倒的な社会的地位を教会は利用した。典型例がかの有名な贖宥状である。修道士が俗人に代わりに厳しい修行を行い，余分に積んだ徳を切り売りすることで，俗人が徳を積んだことになるという考え方であった。このようにローマ教会は，死後の世界を支配することで，俗人に対する社会的地位を不動のものにしていた。

しかし，予定説によって聖職者の俗人に対する支配は終わりを告げた。予定説においては，自分が神によって救済されるかという命題に対して，現世に生きる自分には影響を与えられず，自らの運命は神の一存で生前に決定されている。これは，ローマ教会の支えを通して天国に行くという旧来の考え方とは真っ向から異なる。予定説のもとでは，結局，教会に貢ぐことでは自らの運命は変わらないのである。カルヴァン派信仰を受け入れた北ネーデルラントでは，死後の世界への扉を支配できなくなったローマ教会の社会的地位が失われていった。

では，独立戦争は宗教改革にどのような影響を与えたのであろうか。

独立戦争によって，ローマ教会の聖職者の政治力は削がれ，代わりに都市と，諸州の身分制議会

5）（出所）深井智朗［2017］『プロテスタンティズム』中央公論新社，59-60 ページ。

を制した市民層が政治力を増した。教会は他地域に比べ影響力が弱かったと述べたが，それでも身分制議会で一定の議席枠は保持していた。反乱においては，諸州が団結力を高めるなかで，カルヴァン派信仰を主要な団結の根拠としていた。そのため，ローマ教会派の教会は独立戦争により受け入れられない存在とみなされた。その結果，ローマ教会による政治は否定され，公職から追放されることになった。

また，ローマ教会の信徒であった貴族も独立戦争で力を失った。もっとも，貴族は16世紀初頭には経済的側面で弱体化していた。その背景には，1343年以降，ホラントで支配権の相続問題が発生し，バイエルン家の相続を支持する立場と，それに対抗する立場に都市と貴族が二分して，ブルゴーニュ公が支配権を奪取する1430年まで内戦を行っていたことがある（石坂［1965］39ページ）。その後，平和な時代が到来したかに見えたが，1477年にシャルル豪胆公が死去したことで，1483年にユトレヒト市民とモントフォールト城代がホラントに侵入，ホラント相続問題で負けた一党もロッテルダムを占領した（石坂［1965］39ページ）。このように社会不安が高まるなか，フランドル諸都市の反乱，フランスとの戦争でホラントは荒廃し，貴族は没落した（石坂［1965］39ページ）。

しかし，15世紀になっても，貴族の形式的な政治力は残っていた。反乱前の身分制議会では，聖職者が宗教改革で影響力を失ったものの，貴族は一定の投票権を持っていた。しかし，反乱によってスペイン側につくか，反体制側につくかを迫られた貴族は概してスペイン側につき，議会からは追放されてしまった。スペイン側についたのは，貴族が旧体制に対して誓った忠誠を捨て去ることが，貴族が受け継いできた伝統，つまり貴族を貴族たらしめるシンボルの喪失を意味していたからであった。

例えば，反乱以前のゼーラント州議会は，ミッデルブルフ修道院長，貴族，都市群から成立していた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］482ページ）。しかし，まず始めに修道院長は宗教改革によって投票権を失い，貴族はフェリペ2世側を支持したため，州議会に参加する権利を剥奪された（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］482-483ページ）。ゼーラント州議会の都市の代表権を持つ7都市は，反乱前まで1票を共同で持っていたが，反乱後は4都市がそれぞれ自前の票を持ち，議会での多数派を構成した[6)]（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］482-483ページ）。ホラント州議会でも，反乱後は都市が18票を持ち，貴族は1票しか持たなかった（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］483ページ）。また，反乱後のフローニンゲンでは，州議会の投票権はフローニンゲン市，つまり都市市民と，地方議会が統治する周辺農村部に限られていた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］509ページ）。その地方議会もジェントリと自作農で構成され，貴族の力は自作農によって牽制されていた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］509ページ）。

このように，旧体制下で政治的権力を堅持していたローマ教会やローマ教会を支持していた貴族

6）ゼーラント州議会には全7票あり，都市の4票（都市名：ミッデルブルフ，ジーリクゼー，フース，トールン）の他に，オラニエ公が3票を有していた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］483ページ）。オラニエ公はフェーレとフリッシンゲンの侯爵位を獲得し，2州の代表権を手に入れたため，貴族としての1票と州としての2票を手に入れた（ド・フリース，ファン・デァ・ワウデ［2009］483ページ）。そのため，都市のシェアは実質6票に上った。

は，独立戦争の渦中で政治的権力を失っていった。こうした中で，プロテスタンティズムはそれを押さえ込もうとする勢力を葬り，民衆に広まっていったのであった。

とはいえ，独立戦争による宗教改革の広まりによっても，ローマ教会やその信徒の影響力がなくなったわけではない。ローマ教会派は宗教改革や反乱後も存在した。例えば，反乱が始まって 17 世紀に入るまでの間は，知識人の多くはローマ教会派にとどまるか，カルヴァン派に転換するか依然として決めていなかった（Huizinga［1968］p.49）。また，カルヴァン派信仰が強いゼーラントでもローマ教会派は多かったし，ホラント北部のアルクマールやホラント北部のレイデン，そして東部地域では殆どの村民がローマ教会派にとどまった（Huizinga［1968］p.50）。さらに，独立戦争終決後の 1650 年でも，共和国内に約 30％のローマ教会派がいた（Parker［2008］p.17）。このように，宗教改革は広がったとは言え，旧来の信仰を消し去ることはできなかった。

では，ローマ教会派勢力の残存はユトレヒト同盟地域，そしてネーデルラント連邦共和国が，カルヴァン派勢力の拡大下でも宗教的に寛容であったことを示すのであろうか。宗教的に寛容であったとみる理由の 1 つは信仰の自由が保障されていたことである。ユトレヒト同盟はカルヴァン派の堅持を目的にローマ教会に対抗する軍事同盟であったが，同時に信仰の自由を 1579 年に保障していた。公職は慣習的にカルヴァン派の人々で独占されたが，公式に宣言された国家宗教は存在しなかった（Huizinga［1968］p.48）。また，カルヴァン派は建国当初から，少数派であるルター派や洗礼派を排除しなかった（Huizinga［1968］p.50）。ユダヤ教徒でさえ迫害されることはなかった（Huizinga［1968］p.51）。このような点からすると，宗教的寛容さがあったように見える。

しかし，宗教的寛容さは限定的なものであった。ローマ教会派には不寛容であったのである。例えば，反乱によってローマ教会財産が世俗化されたりするなど，公権力はローマ教会派に厳しい政策を採った（Parker［2008］）。再洗礼派やルター派，さらにはユダヤ教徒には信仰の自由が認められたが，ローマ教会派は信仰税（recognition fee）を払わなければ宗教的自由の一部を手に入れることができなかった（Parker［2008］pp.52-53）。また，アルミニウス派（レモンストラント派）も迫害された。17 世紀初頭，アルミニウスとその支持者（エピスコピウスやグロチウスなど）はカルヴァン派の予定説に疑問を示し，救済の普遍性を説き，そして 46 名のアルミニウス派牧師がアルミニウス主義の認許（Remonstrantie）を政府に求めた。アルミニウス派の広まりの背景には，予定説の不人気があった。つまり，予定説は人々にとって不安の種だった。ウェーバーの言葉を借りれば「自己の選びと義認の主観的確信」の揺らぎ，つまり自分が救われているか確信が持てないことが徐々に社会的問題となった（ウェーバー［1989］178-179 ページ）。このようなカルヴィニズムの限界はアルミニウス派の広まりを支えた。しかし，神学者のホマルスはアルミニウス派に異議を唱えた。その論争はドルトレヒト教会会議（1618 年～1619 年）に持ち込まれ，そして，厳格なカルヴァン派が勝利した。これにより，アルミニウス派聖職者はその職を剥奪され，グロチウスは終身刑を処され，オルデンバルネフェルトは斬首された。

この宗教的寛容さの限定性は，ネーデルラント連邦共和国の出自を思い出せば理解できる。北ネーデルラントはそもそもスペインというローマ教会派の勢力を追い出すべく，独立戦争を行ったのである。宗教的寛容さの範囲をローマ教会派にまで広げてしまえば，独立戦争の正当性を失ってしまうのであり，ひいては共和国を国家たらしめる要素を疑問視することになる。そのため，宗教的寛容さによってローマ教会派を保護するわけにはいかなかった。また，アルミニウス派への迫害はローマ教会派との類似性によるものである。アルミニウス派は恩恵の普遍性を説いていた。これ

は，ローマ教会派の救済に関する考え，つまり，信仰を篤く行えば救われるとする考えと同じであり，カルヴァン派が特に重要視する予定説とは相容れない考えであった。アルミニウス派のグロチウスはカルヴァン派に地下の法王主義者と非難された（トレヴァー＝ローパー［1978］99ページ）。カルヴァン派支持者にとって，「アルミニウス派は変装したローマ教会派[7)]で，隠れたイエズス会士」であった（Geyl［1961］p.45）。そのため，アルミニウス派はローマ教会派と同様に異端視されたのであった。

このように，宗教改革と独立戦争には互いに促進しあう関係があった。プロテスタンティズムの広まりによって，ローマ教会は死後の世界を牛耳れなくなり，人々の社会的地位の平等性を求める声を抑え込めなくなった他，プロテスタンティズムがスペインによる圧政を引き起こし，間接的に独立戦争を引き起こした。また，独立戦争によって政治構造が変化したことで，ローマ教会派が行使していた政治力がなくなった。聖職者や貴族を政界から追放し，政治におけるヒエラルキーがなくなったことで，北ネーデルラントは市民社会の到来に大きく前進した。

3．Revolution と Reading の関係

本節では，独立戦争と識字化の関係について述べる。

既に述べたように，北ネーデルラントでは識字率が16世紀初頭時点で既に高い水準に達していた。第2節ではローマ教会の影響力の弱さが識字率を高めていたと述べた。この節ではより宗教色の薄い要因をもって識字率の高さを説明する。

ネーデルラントは中世末期からヨーロッパの遠隔地貿易の中心であった。商業の興隆は識字能力を必要とした。それを示す例は，中世の遠隔地貿易の中心であったイタリアである。遠隔地貿易や国際的な投資，そして，合同会社の形態は13世紀ごろには地中海交易で見られ，それには識字能力を必要とする手形取引，帳簿づけ，ビジネスマニュアルの作成，雑多な記録をするメモが必要であった（Reinert and Fredona［2020］）。遠隔地貿易という商業活動を受け継いだネーデルラントでも，同じような慣習があったと考えられ，商人の識字能力は高かったと考えられる。大規模な都市で商人は多くの利害関係者との契約関係を書面で整理する必要があった。また，裁判所が市場の近くに設置され，ビジネスを行うなかでトラブルが発生した際に，所有権を主張することができた（ノース，トマス［2014］）。そのような法的フレームワークが機能していたことを踏まえれば，土地保有証明書や物品の所有証明書，より一般的には商業上の契約書を読む能力が十分にあったと考えられる。

また，ホラントにおける徴税制度は識字率の高さを示唆している。中世から分権的なホラントでは全邦的な租税体系を16世紀になっても作り上げておらず，租税は各都市や村々の負担能力に応じて割り当てられていた（石坂［1965］43ページ）。徴税主体の各都市や農村はそれぞれ徴税方法を決めることができた（石坂［1965］43ページ）。都市は消費税（商品課税）制度を作り，13世紀にはビールや葡萄酒だけであった対象が1514年には主要都市で酒類，穀物，酪製品，家畜，肉，塩，魚，泥炭，毛織物，羊毛，皮革，木材，タール，ピッチ，金属類に広げられていた（石坂［1965］43ページ）。このような広範にわたる消費税の課税対象の存在は，ある程度の識字率を前

7）原文（Geyl［1961］p.45）では“papist”というプロテスタントからの侮辱的意味が込められた単語が用いられている。

提にしていたと考えられる。そもそも消費税は取引の記録が前提となる。膨大な取引を記録しておかなければ，消費税の納税は不可能である。取引の記録には識字能力が求められることから，広範な商品が消費税の徴税対象であったということは，それだけ商業従事者のなかで識字率が高く，簿記の能力があったことを意味する。

独立戦争は識字化にどのように影響したのだろうか。この問いに，宗教改革を持ち込まずに答えることは難しい。第 2 節で述べた通り，識字化は宗教改革に多くを依存した。宗教改革の広まりは独立戦争によって加速されたため，識字化は独立戦争によって促されたとも言える。つまり，独立戦争は識字化に間接的に作用した。

しかし，高い識字能力に関連して，独立戦争が「開かれたブルジョワ社会」の到来に果たした役割も注目すべきである。マクロスキーによれば，「開かれたブルジョワ社会」とは機会の平等主義という特徴を持つ社会である（McCloskey［2017］）。中世の伝統のなかで，社会の階層区分を特徴付けたのが，聖職者と貴族による情報の独占であった。内政，外政の情報を独占していたことが，彼らによる統治の正当性の論理を強めていた。しかし，独立戦争によって情報の独占は打ち破られる。なぜなら，新聞が誕生するからである。

高い識字率は新聞の広まりを支えた。北ネーデルラントで新聞は 1618 年頃に登場し，平均日給の 15 分の 1 から 20 分の 1 という安い価格によって，幅広い大衆に読まれた（Groesen［2016］）。一方，アムステルダムでは，新聞の発刊には市議会の承認が必要であった（Groesen［2016］p.336）。ここに，独立戦争の果たした役割があらわれている。聖職者が政治力を持っていた独立戦争前では，文字と情報の独占を重視したローマ教会派の聖職者は新聞の発刊など認めるはずがなかった。貴族も情報の独占を貴族のステータスだと考え，新聞を読んではいたものの，「情報の質が悪い」と，新聞を批判した（Groesen［2016］）。そのため，独立戦争によって聖職者と貴族の影響力が葬られ，市民による政治がもたらされていなければ，新聞の発刊が許可されることはなかった。つまり，独立戦争は識字能力に直接作用したわけではないが，識字能力を必要としたメディアの興隆を支え，それは市民による統治の正当性を支持することになった。

一方，高い識字能力は独立戦争にどのように影響したのだろうか。この問いにも，新聞をキーワードに答える。活版印刷技術の普及と製紙業の登場にも支えられ，1618 年頃に新聞が登場した（Groesen［2016］p.336）。その頃には独立戦争も終盤にさしかかっており，形勢は既に北ネーデルラント有利に傾いていた。しかし，そのなかでも新聞が独立戦争に果たした役割といえば，それは情報の伝達の速さであった。1629 年 5 月 26 日の新聞記事（*Tijdinghen uyt verscheyde quartieren* 紙）によれば，オラニエ公フレデリック・ヘンドリックの率いる兵がヘルデルラントとヴェーゼルにおけるスペイン軍との戦いで連勝を果たし，街を占拠することができたとある（Groesen［2016］p.345）。一方，新聞は書店で購入できたほか，北ネーデルラントの高度な物流網によってほぼ 1 日以内に自宅に届けられていた（Borst［1992］）。このような情報伝達の速さは当局にとっても貴重であった。大衆紙であるにも関わらず，州政府は新聞を定期購読し，重要な意志決定材料として使用していた（Groesen［2016］p.337）。情報を素早く入手することが出来た北ネーデルラントは，終盤ではあったが，有利に独立戦争を戦うことができた。

独立戦争と識字化の間には，弱い，または間接的な因果関係が見られた。独立戦争は識字化に宗教改革というプロセスを経て作用し，そして，「開かれたブルジョワ社会」の到来に必要であった情報の独占を新聞の誕生で打ち破った。一方，識字化に支えられ誕生した新聞は戦局の情報伝達を

行い，それは独立戦争を進める北ネーデルラントに有利に働いた。

Ⅳ．結論

本稿では，マクロスキーの4Rモデルの検証を行った。16世紀後半から17世紀前半の北ネーデルラント，オランダにおける社会変動を描き，4つのRの相互連関を確認した。識字化と宗教改革の関係については，前者が後者を促し，また後者が前者を促すという双方向的な因果関係が確認できた。プロテスタント諸派の信仰形態は識字能力を前提条件に据えていたし，それが理由でプロテスタンティズムを普及させる人々は識字化を進めようとした。宗教改革と独立戦争についても，同様の関係が判明した。宗教改革はスペインによる圧政を招き寄せ，独立戦争の下地となった。一方，独立戦争は旧来のローマ教会派による政治的支配を終わらせた。また，独立戦争の背景は，オランダの宗教的寛容さの限定性とその理由を浮かび上がらせた。独立戦争と識字化の関係は新聞を主題に答えた。しかし，独立戦争が宗教改革と密接に関係しており，「宗教改革と識字化の関係」と「独立戦争と識字化の関係」を明確に切り離して考察することが困難であるため，直接，独立戦争が識字化に与えた影響を独立したものとして切り出すことはできなかった。例えば，学校教育の普及には宗教改革による教義の変化が間違いなく影響したが，宗教改革を促進したのは独立戦争なのである。このように，宗教改革は独立戦争を説明するうえで分離が不可能なものである。そのため，識字化と独立戦争の関係を，宗教改革の要素を抜きにして考察することは困難であった。しかし，独立戦争終盤には，新聞が戦争に関する速報を届け，北ネーデルラントが情報の豊富さをもって有利に戦争を進めたと示唆することができた。一方，戦時中はプロパガンダのためにビラといった他のメディアが使われた可能性もあり，さらなる研究課題となるであろう。

トレヴァー＝ローパーは，啓蒙主義の前進はイデオロギー的平和と国家間の友好的接近の時代に形成されたと述べ，革命といった大きな社会変動があった時代には，近代市民社会の成立は妨害されたとした（トレヴァー＝ローパー［1978］67-125ページ）。しかし，トレヴァー＝ローパーは啓蒙主義の前進と事件の発生時期を単に並べて論じているに過ぎない。実際には，16世紀後半から17世紀前半の北ネーデルラント，オランダの社会変動によって社会の階層区分が崩れ，近代市民社会の成立に必要な素地ができたのであった。ローマ教会派の聖職者を頂点とする階層社会が，全信者が聖職者であるとする平等主義的観念の擡頭を前に崩壊してゆくことで，イノベーションや自由な商業活動を封じ込めない倫理を持った環境，つまり，「開かれたブルジョワ社会」が形成され，経済が飛躍的成長を遂げていくことになった。

参考文献

石坂昭雄［1965］「オランダにおける農村工業の生成とその禁圧―オランダ型貿易国家における農村工業」『土地制度史学』第8巻第1号，38-59ページ。

ウェーバー，マックス［1989］『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳，岩波書店。

河原温［1996］『中世ヨーロッパの都市世界』山川出版社。

コルナイ，ヤーノシュ［2016］『資本主義の本質について―イノベーションと余剰経済』溝端佐登史，堀林巧，林裕明，里上三保子訳，NTT出版。

トッド，エマニュエル［1992］『新ヨーロッパ大全Ⅰ』石崎晴己訳，藤原書店。

ド・フリース，J，A. ファン・デァ・ワウデ［2009］『最初の近代経済―オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815』大西吉之，杉浦未樹訳，名古屋大学出版会。

トレヴァー＝ローパー，H・R［1978］『宗教改革と社会変動』小川晃一，石坂昭雄，荒木俊夫訳，未来社。

ノース，D・C，R・P・トマス［2014］『西欧世界の勃興―新しい経済史の試み』速水融，穐本洋哉訳，ミネルヴァ書房。

深井智朗［2017］『プロテスタンティズム―宗教改革から現代政治まで』中央公論新社。

Borst, H.［1992］ “Van Hilten, Broersz en Claessen: Handel in boeken en actueel drukwerk tussen Amsterdam en Leeuwarden in 1639,” *De zeventiende eeuw*, 8（1）, pp. 131-138.

Geyl, P.［1961］ *The Netherlands in the Seventeenth Century pt. 1*, London, Ernest Benn.

Groesen, M.v.［2016］ “Reading Newspapers in the Dutch Golden Age,” *Media History*, 22（3）-（4）, pp. 334-352.

Huizinga, J.H.［1968］ “Dutch Civilisation in the Seventeenth Century,” in *Dutch Civilisation in the Seventeenth Century and Other Essays*, translated by A.J. Pomerans, ed. by Geyl, P. and F.W.N. Hugenholtz, New York and Evanston, William Collins Sons & Co. Ltd. and Harper & Row Inc., pp. 9-104.

McCloskey, D.N.［2010］ *Bourgeois Dignity: Why Economics Can't Explain the Modern World*, Chicago and London, The University of Chicago Press.

McCloskey, D.N.［2017］ *Bourgeois Equality: How Ideas not Capital or Institutions, Enriched the World*, Chicago and London, The University of Chicago Press.

Parker, C.H.［2008］ *Faith on the Margins: Catholics and Catholicism in the Dutch Golden Age*, Cambridge, Harvard University Press.

Reinert, S.A. and R. Fredona ［2020］ “Merchants and the origins of Capitalism,” in *The Routledge Companion to the Makers of Global Business*, ed. by Lopes, T.d.S., C. Lubinski, and H.J.S. Tworek, Abington and New York, Routledge, pp.171-188.

Tracy, J.D.［1985］ *A Financial Revolution in the Habsburg Netherlands: Renten and Renteniers in the County of Holland, 1515-1565*, Berkeley, Los Angeles and London, University of California Press.

Tracy, J.D.［1990］ *Holland under Habsburg rule 1506-1566: the formation of a body politic*, Berkeley, Los Angeles and Oxford, University of California Press.